

チンゲンサイ（平坦地）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型												
主な作業	播 種	収 穫		播 種	収 穫				播 種	収 穫		

技術体系

1 作型の特徴

本来冷涼性の野菜ではあるが、コマツナなどに比べ高温や過日照にも強いので、遮光や保温により、ほぼ周年栽培が可能である。

2 適応地域

平坦地域

3 栽培条件

(1) 温度

発芽適温は、20 ～ 25 ℃で、限界域は5 ～ 35 ℃である。適温では1 ～ 3 日で発芽するが、冬場のトンネル栽培など10 ℃以下の場合は10 日前後必要である。

生育適温は15 ～ 20 ℃（夜間8 ～ 10 ℃）で、35 ℃以上や5 ℃以下になると生育が抑制される。

1 株重量と日平均気温の積算温度には密接な関係があり、100 g 程度の小株どりで700 ℃前後、200 g 以上の大株で800 ℃を確保する必要がある。これによれば、目的とする株重量と収穫予定日からおよそその播種日を決定することが出来る。

(2) 光

光飽和点は8万5千ルクスで、7万ルクス位まで光合成速度は上昇する。しかし、盛夏では10万ルクス以上になるため、適切な遮光が必要である。

(3) 抽だい条件

他のツケ菜類同様、低温に感応して花芽分化し、長日条件下で花茎の伸長が起こるため、低温に長く遭遇する作型では、保温を主とする栽培管理や晩抽だい性品種の選定が大切となる。

(4) 土壌条件

あまり選ばないが、根が細かく深く張るので耕土の深い肥沃なほ場を選ぶ。また、周年栽培では塩類集積に注意するとともに、有機物を充分施用した土づくりを行う。

湿潤に比較的強く、乾燥土壌での生育は著しく抑制される。

4 施設装備

(1) 単棟ハウス

(2) 灌水施設

5 経営目標

(1) 収量

2.1t/10a

(2) 投下労働時間

1,800 時間/10a

(3) 所得率

30 %

(4) 経営規模

20a

（家族労働力2人の場合）

栽培技術

1 品種と特性

「青帝」 高原の項参照

「夏賞味」 高原の項参照

「次男坊」 高原の項参照

「青武」

耐暑性に優れ、高温期での節間伸長、石灰欠乏症が少ない。周年播種できるが、10～3月はハウスで栽培が必要。

「夏しんとく」

夏まき専用（5～9月播種）の早生種だが、7～8月の盛夏には遮光が必要である。

2 播種

播種量は、直播き栽培では1a当たり1d1、移植栽培であれば15～20ml程度でよい。

3 本圃準備

(1) 土づくり

比較的酸性土壌には強いが、カルシウム要求性が強いので、播種10日前には10a当たり石灰質資材を100～200kgと完熟堆肥を1～2t程度施用する。

(2) 施肥

生育期間が短いので、基肥のみの施用とする。

施肥量 (kg/10a)

	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
基 肥	15～20	12～15	12～15

連作する場合は土壌分析にもとづいた施肥設計を行う。

4 栽培管理

(1) 栽植様式

100～120cmの畦に、条間15～18cm、株間10～15cmで3～4粒ずつ播種し、本葉3～5枚までに間引きを行い、最終的には1本立てとする。

移植する場合の育苗日数と苗の大きさは、夏場は14日前後で本葉2.5枚、冬場は30～40日で本葉3.5～4.5枚を目安とする。また、栽植本数は2,800～3,500株程度だが、徒長しやすい夏場はやや広めの株間とする。

(2) 温度管理

ハウス栽培では26℃が換気を目安で、高温による品質低下を防ぐ。春～秋はほとんど雨よけ栽培と

なるが、入り口やサイド等に寒冷紗や防虫ネットを設置し、害虫の侵入を防ぐ。

冬期はハウス内での栽培となるが、抽だいや寒害を防ぎ生育を促進するため、トンネルやべたがけ被覆が効果的である。しかし生育後半までのべたがけは、葉色がうすくなったり葉のねじれ等の品質低下につながるので注意する。

(3) 灌水

特に発芽～定植活着までの幼苗期は、乾燥に弱いので充分灌水する。以降は乾いたら灌水する程度で根張りを促進する。

灌水は灌水チューブを利用し、晴天の続く日を選んで、秋～春は午前中、夏は気温の下がった夕方に行う。特に夏場は高温乾燥により、チップバーンやホウ素欠乏症等の生理障害が出やすくなるので注意する。

6 収穫

(1) 収穫所要日数

播種または定植から収穫までの所要日数はだいたいの表のとおりである。

春～秋、特に夏場は収穫適期が3～4日と短く、穫り遅れによる品質低下が問題となるので、収穫労力を考慮した作付けを行う。

収穫までの日数

播種期	播種(定植)～収穫の所用日数
春	40～45 (25～30) 日
夏	35～40 (20～25) 日
秋	45～50 (30～35) 日
冬	60～80 (40～45) 日

(2) 収穫

草丈20cm以上、100～120g程度になったときが収穫開始期で、5～10月は朝どりを行い品質低下を防ぐ。

いったん地際で根を切り、外葉を整理しながら基部を二度切りすると葉の間に泥がつきにくい。

調整・出荷作業は、涼しい調整室等で行い、さらに4～10月は、予冷施設等を利用すると品温が上がり品質を維持できる。